

ローマがビジョンを確立する - その三

アメリカ合衆国と預言的ビジョン：深い聖書研究と理解への呼びかけ

Jeff Pippenger

2024-07-14

前の二つの記事で、『ダニエル書』11章14節の「あなたの民の略奪者」「幻を確立する」によってアメリカ合衆国が象徴されていると主張する私的解釈を扱い、私たちはエレン・ホワイトの筆による「教会の成員は一人ひとりが試され、証明される」と記した一節を引用した。マラキ書3章で契約の使者が銀と金を清めることとして表されている、その証明・試練・ふるい分けの過程は、今まさに進行している。マラキ書3章には、清めが示されている。

彼は銀を精錬し清める者として座し、レビの子らを清め、彼らを金銀のように精錬して、彼らが主に義のささげ物をささげることができるようにする。そのとき、ユダとエルサレムのささげ物は、昔の日々のように、往年のように、主に喜ばれるものとなる。マラキ書 3:3、4。

米国がビジョンを確立する象徴だという考えを堅持する人々は、2023年7月に封印が解かれたメッセージこそが、十四万四千人の一員となる候補者をふるいにかけるものであることを理解できず、あるいは理解しようとしなかった。カペナウムの会堂では、十四万四千人の最終的なふるい分けが予想されていた。

イエスは彼らにはっきり言われた。「あなたがたの中には信じない者がいる。」そして付け加えて言われた。「だからわたしはあなたがたに言ったのだ。だれも、わたしの父から与えられない限り、わたしのもとの来ることにはできない。」イエスは、もし彼らのご自身に引き寄せられないのだとしたら、それは彼らの心が聖霊に開かれていないからだとして理解してほしかったのである。「生まれながらの人は、神の御霊の事柄を受け入れません。それは彼には愚かに見えるからです。また、それらを知ることもできません。霊的に見分けられるものだからです。」第一コリント 2:14。魂は信仰によってイエスの栄光を見る。この栄光は、聖霊によって信仰が魂のうちに灯されるまで、隠されている。

彼らの不信仰が公に叱責されたことによって、この弟子たちはさらにイエスから遠ざかった。彼らはひどく不快に感じ、救い主を傷つけてパリサイ人の悪意を満足させようとして、彼に背を向け、軽蔑してその場を去った。彼らは自ら選び取ったのであり——霊なき形、実のない殻を取ったのだ。その決定がその後覆されることは二度となかった。彼らはもはやイエスと共に歩むことはなかったからである。

「『手に箕を持っておられ、打ち場を徹底的に清め、麦を集めて倉に納められる。』マタイ3章12節。これは清めの時の一つであった。真理の言葉によって、もみ殻が麦からふるい分けられていた。戒めを受け入れるにはあまりにも虚栄と独善に満ち、謙遜な生活を受け入れるにはこの世を愛しすぎていたため、多くの者がイエスから離れていった。今もなお多くの人と同じことをしている。今日も魂は、カペナウムの会堂にいたあの弟子たちのように試されている。真理が心に迫ると、自分の生き方が神の御心

にかなっていないことが見えてくる。自分自身が全く変えられる必要を悟るが、自分を捨てる務めを引き受けようとはしない。だから、自分の罪が明るみに出ると怒り、弟子たちがイエスから離れたときのように、つまずいて去って行き、『これは聞きにくい言葉だ。だれがそれを聞いていられようか』とつぶやく。』『The Desire of Ages』392頁。

「真理の言葉」によって、十四万四千人の最後の神殿の清めについてのマラキ書のたとえにおける金と銀が表された。

見よ、わたしはわたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を備える。あなたがたが求めている主、すなわちあなたがたが喜ぶ契約の使者は、その宮に突然来られる。見よ、彼は来る、と万軍の主は言われる。しかし、彼の来る日をだれが耐えられようか。彼が現れるとき、だれが立っていられようか。彼は精錬する者の火のようであり、布をさらす者の灰汁のようである。マラキ書 3:1、2。

マラキを含むすべての預言者は、終わりの時を指し示している。これらの記事のうち最初に引用した『The 1888 Materials』403ページには、次のように記されている。「聖書についての自分の現在の不完全な知識に満足して、これで自分の救いに十分だと考えている者は、致命的な欺瞞の中に安住している。誤りを見分け、真理として押し付けられてきたあらゆる伝統や迷信を退けることができるような、聖書的論証に十分に備えられていない者が多い。」同じ箇所では指摘されている人々は、「綿密な聖書研究者ではない」。彼らは「意見の相違」のある「聖書の箇所」を「目的をもって」研究していない。ここで言及されている人々は、「自分の魂にその髓と脂を取り入れる[ために]聖書を読まない。彼らは、それが自分たちに語りかける神の御声であるとは感じない。しかし、もし私たちが救いの道を理解し、義の太陽の光線を見ることを望むなら、」彼らは「目的をもって聖書を学ばなければならない」。

最初の記事は、彼らの誤った預言モデルの構成要素の一つが『The Great Controversy』の一節であることを指摘した。そこには次のように記録されている。「旧世界のローマ主義と新世界の背教的プロテスタンティズムは、神のすべての戒めを尊ぶ者たちに対して同様の道をたどるだろう」。The Great Controversy, 615. 彼らの私的な解釈は、この文が「ローマ主義」を過去の歴史、「背教的プロテスタンティズム」を現代世界として特定していると主張している。この文の適用が正しい意味からねじ曲げられていることを示す文法的証拠が示された後でも、彼らはその誤った適用を公に撤回しなかった。実際、彼らはまさにその箇所を次回のZoomミーティングの宣伝に用いた。それにもかかわらず、私たちはこう教えられている。「人々が真理とは何かを自ら確信して知ることができるよう、神の真理を熱心に探求する必要性を、すべての人に強く銘記させるべきである」。虚偽の主張を撤回しようとする努力は見られず、これはこの誤った適用を推進している者たちが「真理とは何かを知る」ために「熱心に探求する」ことをしていないことの証拠のように見える。

この論争の初めから、私たちは、それが「あなたの民を略奪する者たち」が誰を指すのかという、真理と誤りの単なる意見の相違以上のものだと捉えてきたし、その立場はいまも変わらない。ダニエル書に関する記事は、連載二百回に至るころには、ダニエル書十一章十三～十五節の意義が確固として示される段階に達していた。これらの節は、1989年

から、ダニエル書十一章四十節にある間もなく到来する日曜法に至るまでの歴史を表している。

私たちはその歴史を40節の隠された歴史として特定してきた。また、ホワイト姉妹が「封じられていた書は黙示録ではなく、終わりの時に関するダニエルの予言のその部分である」と述べるとき、ダニエル書11章40節の隠された歴史こそが「ダニエルの予言のその部分」であることも明らかにしてきた。13節から15節は、終わりの時に封印が解かれる預言の真理を表している。したがって、その三つの節は、猶予期間の終結直前に封印が解かれる黙示録において、「イエス・キリストの啓示」と「七つの雷」の双方としても表されている。ホワイト姉妹がその「ダニエル書の一部」に言及する際、その記述が置かれている箇所には次のように記されている：

黙示録にあるすべての象徴の意味を説明できないからといって、この書を調べ、その中に含まれている真理の意味を知ろうと努めることは無益だと、だれも考えてはならない。これらの奥義をヨハネに啓示されたお方は、真理を熱心に求める者に、天の事柄の一端を味わわせてくださる。真理を受け入れることに心を開いている人は、その教えを理解することができ、また「この預言の言葉を聞き、そこに書かれていることを守る者」に約束された祝福を与えられる。

黙示録において、聖書のすべての書は合流して終わりを迎える。ここで『ダニエル書』は補完される。一方は預言であり、他方は啓示である。封印されたのは『黙示録』ではなく、終わりの時に関する『ダニエル書』の預言のその部分である。天使は命じた、「しかしあなたは、ダニエルよ、この言葉を秘め、終わりの時までこの書を封じよ」。ダニエル書12章4節。『使徒行伝』584、585。

「complement」という語は、物事を完成させ、完璧に仕上げることを意味する。終末に関するダニエル書の部分は、終わりの時に封印が解かれ、「Revelation of Jesus Christ」と「the Seven Thunders」を「line upon line」で組み合わせると、完全なものとなる。それら三つの表現は封印の解かれたメッセージであり、したがって、ダニエル書11章13～15節に示されているように、マラキ書の最終的な神殿の清めにおいて十四万四千を「清める」ために用いられる「真理のこぼれ」を表している。その中間の節は、現在の論争が表されている節であり、その意味で、ミラー派が預言的歴史の中で直面したのと同じ論争を表している。

十四節の「あなたの民を略奪する者」がアメリカ合衆国であると主張することは、ミラー運動の歴史におけるプロテスタントたちが、その「略奪者」はアンティオコス・エピファネスを表していると主張したことと完全に並行するものである。論争は金や銀から不純物を取り除くだろうが、より重要なのは、この論争が、マラキ書三章のレビ人によって表される人々を、かつてないほど深く神の預言の言葉を学ぶよう導くことを許されてきたという点である。ウィリアム・ミラーの夢に現れる「ちりを払う人」は、今や偽の硬貨や宝石を部屋から掃き出しており、本物の宝石を太陽の十倍も明るく輝く完全な秩序へと組み直す御業に先立って、それを行っている。

その論争は、まさにその働きを成し遂げるために起こることが許された。なぜなら、私たちは次のように知らされているからである。「神はご自分の民を目覚めさせられる。もし

他の手段がうまくいかないなら、異端が彼らの間に入り込み、彼らをふるいにかけて、もみ殻と麦を分けるだろう。主は、御言葉を信じるすべての者に、眠りから目を覚ますよう呼びかけておられる。尊い光が来ており、今の時にふさわしい光である。それは聖書の真理であり、私たちの目前に迫っている危険を示している。この光は、聖書を熱心に学び、私たちが保持している立場を最も厳密に吟味することへと私たちを導くはずである。神は、祈りと断食をもって、真理のあらゆる側面と立場が徹底的に、そして忍耐強く探究されることを望んでおられる。信者は、何が真理かについての推測や曖昧な考えに安住してはならない。」

彼が眠っている聖徒たちを目覚めさせるために許し、用いる「異端」は「古い論争」である。

歴史と預言において、神の御言葉は真理と誤りの長く続く闘いを描いている。その闘いは今なお進行中である。かつてあったことは、繰り返される。古い論争は再燃し、新しい理論が絶えず起こるだろう。だが、第一・第二・第三天使のメッセージの宣言において、信仰においても預言の成就においても一役を担ってきた神の民は、自分たちの立場を知っている。彼らは純金にもまさる尊い経験を持っている。彼らは岩のように堅く立ち、初めの確信を終わりまで堅く保たなければならない。『選ばれたメッセージ』第2巻、109頁。

『あなたの民の略奪者』をめぐる論争は、ミラー派の歴史にさかのぼる古い論争であり、それは彼らが『終わりまで堅く』保つように言われている『彼らの確信の始め』である。十四万四千人の『確信』の『始め』は、1843年と1850年の先駆者の図表に示されている土台となる真理である。

敵は、この終わりの時代に堅く立つ民を備える働きから、私たちの兄弟姉妹の思いをそらそうとしている。彼の詭弁は、この時の危険と務めから人々の心を引き離すために仕組まれている。彼らは、キリストが天から来て、彼の民のためにヨハネに与えるための光を、取るに足らないものと見なしている。彼らは、目の前に迫っている出来事は特別な注意を払うほど重要ではないと教える。彼らは天来の真理を無効にし、神の民の過去の経験を奪い、その代わりに偽りの科学を与える。

「主はこう言われる。道に立って見よ、昔からの道を尋ね、どれが良い道かを問い、そこを歩め。」

誰一人として、私たちの信仰の土台、すなわち私たちの働きの初めに、御言葉を祈り深く学び、啓示によって据えられたその土台を、取り去ろうとしてはならない。私たちはこの五十年間、この土台の上に建て上げてきた。人は、自分たちが新しい道を見いだしたのだと考え、すでに据えられているものよりも強固な土台を据えることができるとも思えない。しかし、これは大いなる欺きである。すでに据えられている土台以外に、別の土台を人は据えることができない。

これまで多くの者が、新たな信仰を築き、新たな原則を打ち立てようとしてきた。だが、彼らの建てたものはどれほどの間、持ちこたえただろうか——ほどなく崩れ落ちた。岩の上に据えられていなかったからである。

最初の弟子たちは、人の言葉に立ち向かわなければならなかったではないか。彼らは偽りの説に耳を傾け、そしてすべてをやり終えたうえで、「据えられている土台以外の土台を、だれも据えることはできない」と言って、堅く立たなければならなかったのではないか。

「それゆえ、私たちは初めに抱いた確信を終わりまで堅く保たなければならない。力あることばが、神とキリストからこの民に送られ、彼らを世から一つ一つ、現在の真理の明るい光のもとへと導き出してきた。聖なる火に触れられた唇をもって、神のしもべたちはそのメッセージを宣べ伝えてきた。神の御告げは、宣べ伝えられた真理の真正さに証印を押した。」 『レビュー・アンド・ヘラルド』 1904年3月3日。

エレミヤの「古き道」とは、「私たちの働きの初めに据えられた土台」である。それらの真理は「岩の上に」据えられており、ミラー派の歴史において、それらの土台となる真理は1842年、1843年、1844年に宣べ伝えられた「現在の真理」のメッセージであった。

私が語った言葉をあなたが受け入れられるよう、神が助けくださいますように。シオンの城壁の上に神の見張り人として立つ者たちが、民の前にある危険を見抜き、真理と誤り、義と不義を見分けることのできる者でありますように。

「警告が与えられた。1842年、1843年、1844年にそのメッセージが来て以来、私たちが築き上げてきた信仰の土台を乱すようなものは、何ひとつ入り込むことを許してはならない。私はこのメッセージの中にあり、以来ずっと、神が私たちにお与えになった光に忠実に、世の前に立ち続けてきた。私たちは、日ごとに主を熱心に祈り求め、光を求めつつ足を据えたあの基台から、足を離すつもりはない。神が私にお与えになった光を、私が手放すことができると思うだろうか。それは永遠の岩のようであればならない。その光は与えられて以来、ずっと私を導いてきた。兄弟姉妹よ、神は生きておられ、今も統べ治め、働いておられる。御手は舵輪の上にあり、御摂理のうちに、その御心のままにその舵輪を回しておられる。人は、何をするか、何をしないかを定めた文書に自らを結び付けてはならない。むしろ、天の主なる神にこそ自らを結び付けるべきである。すると、天の光が魂の宮に差し込み、私たちは神の救いを見るであろう。」 Review and Herald, 1903年4月14日。

「1842年、1843年、1844年」に宣べ伝えられたメッセージは、1843年の図表に示されたメッセージである。1842年5月に、1843年の図表が三百枚印刷された。エレン・ホワイトと開拓者たちは皆、この図表がハバクク書2章の「幻を書き、板に明確にせよ」という命令の成就であると証言した。まさにその時代にはミラライトの説教者が三百人おり、SDAの歴史家たちは、彼らが皆1843年の図表を用いたという事実を証言している。

図表に示されているとおり、ローマを「汝の民を略奪する者たち」と位置づけた先駆者たちの見解は誤りだと、いったい何が人に主張させるのか。何がまた、その主張を受け入れさせるのか。にもかかわらず、ローマが「汝の民を略奪する者たち」という表現で象徴されるという先駆者の理解を受け入れると主張しながら、実際にはその理解を自分で擁護できない私たちの中の者たちには、いったい何がそうさせているのか。

最初の記事で、次の一節を引用しました：

人間の知性がどれほど進歩していようとも、より大いなる光を得るために聖書を徹底して絶えず探求する必要はないなどと、片時たりとも考えてはならない。私たちは民として、一人ひとりが預言の学徒となるように召されている。神が私たちにお示しになるどんな一筋の光も見分けられるよう、熱心に見張っていなければならない。『証言』第5巻、708頁。

私は、神が今「私たちに」示しておられる「光」とは、私たちがダニエル書11章の最初の十五節を個人的に理解する責任に十分に目覚めていないこと、そして同じ章の十三節から十五節が十四万四千人の最終的な清めと封印を成し遂げる真理を表していることを理解していないことである、と主張する。もしまさにこの時代に異端が持ち込まれていなかったなら、それは私たちが完全に目覚めていることの証拠となっただろう。だが、この論争はその逆を証明している。

神の民の間に論争や動揺がないという事実を、彼らが健全な教理を堅く保っていることの決定的な証拠と見なしてはならない。彼らが真理と誤りを明確に見分けていないのではないかと恐れるべき理由がある。聖書の研究から新たな問いが起こらず、また、真理を確かめるために人々が自ら聖書を探るようになるきっかけとなる意見の相違も生じないとき、昔と同様に、今もまた、多くの者が伝統に固執し、何を礼拝しているのかも知らずに礼拝することになるだろう……

神はご自分の民を目覚めさせられる。ほかの手段が功を奏さないなら、異端が彼らの間に入り込み、それが彼らをふるいにかけ、もみ殻と麦とを選り分けるだろう。主は、ご自分の御言葉を信じるすべての者に、眠りから目を覚ますよう呼びかけておられる。今この時にふさわしい尊い光が与えられている。それは、私たちの目前に迫っている危険を示す聖書の真理である。この光は、聖書を熱心に研究し、私たちが取っている立場を最も厳密に吟味することへと私たちを導くべきである。神は、祈りと断食をもって、真理のあらゆる側面と立場を、徹底して忍耐強く探求することを望んでおられる。信じる者たちは、真理とは何かに関する憶測や漠然とした考えに安住してはならない。彼らの信仰は、試練の時が来て、その信仰について答えるために評議会の前に引き出されるとき、彼らの内にある希望について、柔和と畏れをもって理由を述べることができるよう、神の御言葉の上に堅く据えられていなければならない。

論じよ、論じよ、論じよ。私たちが世界に提示する主題は、私たち自身にとって生きてきた現実でなければならない。私たちが信仰の基本条項と見なす教理を擁護するときには、完全に妥当とはいえない論拠に訴えることを決して自らに許してはならない。『証言』第5巻、708ページ。

神の民の略奪者たちに関するこの考察を進めるにあたり、ダニエル書11章14節をめぐるプロテスタントとミラー派の間で交わされた議論が、ローマではなくアメリカ合衆国がその幻を確立するのだとする新しい私的解釈をめぐる議論と同一であることを示す。

『The Great Controversy』が過去の歴史を指し示すために「old world」という表現を用いているという立場は、「仮定であり定義の曖昧な考え」であり、「完全に健全とはいえない議論」の一例である。

その聖句を用いて、ミラー派が「汝の民を奪う者」をローマと特定したのは誤りだという自説を支えようとしてきた者たちは、キリスト者としての務めを果たし、その主張を

公に撤回すべきである. というのも、それは文法的にも歴史的にも成り立たないからだ. この論争を傍観している方々は、真理のことは正しく取り扱う責任がある. あなたがたは、ある人間の考えに従う者ではなく、預言を学ぶ者として召されているのだから.

人々は聖書を曲解して自らの滅びを招く.

また、わたしたちの主の忍耐が救いであると心得なさい. これは、愛する兄弟パウロも、彼に与えられた知恵に従って、あなたがたに書き送っているとおりです. 彼はすべての手紙の中でもこれらのことについて語っており、その中には理解しがたい事柄もあります. そのため、無学で不安定な者たちは、ほかの聖書と同様にそれらを曲解し、自分自身の滅びを招いています. ですから、愛する者たちよ、あなたがたは前もってこれらのことを知っているのですから、悪しき者たちの誤りに引きずられて自分自身の堅固さから落ちてしまうことのないよう、気をつけなさい. むしろ、恵みと、わたしたちの主であり救い主イエス・キリストについての知識において成長しなさい. 栄光が今も、また永遠に、彼にありますように. アーメン. 第二ペテロ 3:15-18.

ペテロは、「無知で心の定まらない者たちが、聖書を自分の滅びに至るように曲解する」と述べている. このことと一致して、ホワイ夫人は私たちに自ら学ぶよう繰り返し警告している. もし私たちが預言を学ぶ者としての責任を果たしていないなら、私たちは自らの滅びを決定づけているのだ.

幻を打ち立てるのは、汝の民を略奪する者たちであり、ソロモンは、幻のないところでは民が滅びると指摘している.

啓示がないところでは、民は滅びる. しかし、律法を守る者は幸いである. 箴言 29:18.

「perish (滅びる)」の定義の一つは、裸にされることである. 幻に対する誤った理解があるところでは、その幻を確立する象徴が理解されていないか、誤って理解されているという事実に基づいている. ソロモンの警告において滅びる者たちの仲間に加わるということは、間近に迫る日曜法において主の口から吐き出されるラオデキヤ人によって象徴される裸の状態に身をさらすことを意味する. 旧世界と新世界に関するホワイ姉妹の明確な発言の意味を歪め、さらに、幻を確立するのはローマであるというミラー派の同定を退けるような考えを、なぜ私たちは受け入れるのだろうか. それは1843年の図表に直接示されており、その図表はアドベンチズムの基礎的真理を表し、そしてその基礎とは、あらゆる聖なる基礎の図像によって表される世々の岩なるキリストその方にほかならないのである.

しかし、神の言葉以外の土台の上に建てられたどんな建物も倒れる. キリストの時代のユダヤ人のように、人間の考えや意見、人の考案した形式や儀式、あるいはキリストの恵みに頼らず自分で成し得るいかなる行いをも土台としている者は、自らの品性という建物に移ろいやすい砂の上に築いているのである. 猛烈な誘惑の嵐はその砂の土台を吹き払い、彼の家を時の岸辺に打ち捨てられた残骸と化させるだろう.

「それゆえ、主なる神はこう言われる…また、私は裁きを測り縄とし、義を下げ振りとする. 雹は偽りの避け所を掃き払い、水は隠れ場を押し流す.」イザヤ書 28:16,

17.

しかし今日、憐れみは罪人に呼びかけている。「わたしは生きている、と主なる神は言われる。わたしは悪しき者の死を喜ばない。むしろ、悪しき者がその道から立ち返って生きることを望む。立ち返れ、立ち返れ、あなたがたの悪しき道から。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。」エゼキエル書33章11節。今日、悔い改めない者に語りかける声は、かつてご自分の愛する都を見て心の痛みに叫ばれたお方の声である。「ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた者たちを石で打つ者よ。わたしは幾たび、めんどりが自分のひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを集めようとしたことか。だが、あなたがたは望まなかった。見よ、あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。」ルカ13章34、35節、R.V. エルサレムにおいて、イエスはご自分の恵みを退け、悔る世の象徴をご覧になった。おお、頑なな心よ、イエスはあなたのために泣いておられたのだ！イエスの涙が山の上で流されたその時でさえ、エルサレムはなお悔い改めて、その破滅を免れることができた。しばらくの間、天からの賜物は、なおエルサレムがそれを受け入れるのを待っていた。だからこそ、おお、心よ、キリストはいまもなお、愛の言葉であなたに語りかけておられる。「見よ、わたしは戸の外に立って叩いている。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入り、彼とともに食事をし、彼もまたわたしとともに食事をする。」「今は恵みの時、見よ、今は救いの日である。」ヨハネの黙示録3章20節；コリント人への第二の手紙6章2節。

自分自身に希望を置いているあなたがたは、砂の上に建てているのです。しかし、差し迫った破滅から逃れるのに、まだ遅すぎではありません。嵐が襲いかかる前に、確かな土台へと逃れなさい。「主なる神はこう言われる。見よ、わたしはシオンに、基のために一つの石、試みを経た石、尊い隅の石、確かな土台を据える。信じる者は慌てふためくことがない。」「わたしを仰ぎ見よ、地の果てのすべての者よ。そうすれば救われる。わたしは神であり、ほかにはいない。」「恐れるな。わたしがあなたと共にいるからだ。たじろぐな。わたしがあなたの神だからだ。わたしはあなたを強め、まことにあなたを助け、まことにわたしの義の右の手であなたを支える。」「あなたがたは、とこしえに、恥をこうむることも、うろたえることもない。」イザヤ書 28:16, R.V. ; 45:22; 41:10; 45:17. 祝福の山からの思い、150-152.

次回の記事でこの研究を続けます。